

„Peace is just another way ...“  
Zur Vieldeutigkeit des Friedensbegriffs

Michael Quante

「平和はまさしくもう一つの道……」  
平和概念の多義性について

ミヒャエル・クヴァンテ（ミュンスター大学教授）

Übersetzt von Katsuto Nakanishi

中西 捷渡 訳

そのときには、世界のなかに、すべての人間の幼年期を照らしだす  
ものであるとともにまだかつて誰も行ったことのないところ、すな  
わち故郷が成立するのである！。

エルンスト・ブロッホ

I.

平和とは重層的な現象である。その点で平和は、私の講演の題目で暗に示されているように、自由  
に似ている。この重層性に対応して、平和という概念は多くの意味を持っている。このことは自由  
という概念の場合と変わらない。もしもクリス・クリストファーソンの歌の歌詞を——おそらく  
ジャニス・ジョプリンがカバーしたものだろうが——聴いたことがあれば、こんな一節が思い浮か  
ぶかもしれない。

Freedom's just another word for nothin' left to lose,  
自由っていうのは、もう失うものが何もないってこと  
And nothin' ain't worth nothin' but it's free,  
自由でないと、どんなことにも価値はない

ここでは、二つの次元が取り上げられている。言葉の多義性が問題となるならば、我々はこれら  
を区別しなければならない。一方では、ある言葉は多くの意味を持ちうる。これが第一の次元であ  
る。自由という言葉の場合、我々は何事かをなす権利とならんで、何かから自由であるという意味  
の消極的自由についても述べている。他方では、その言葉の意味でもって重要性、すなわち何事か  
の重大さが表されていることもある。これが第二の次元である。自由の場合、自由が最高善である  
か否かという問題が直ちに懸案事項となる。自由のために我々は、他のあらゆる価値あるものを、  
例えば正義や団結、平和といったものを、撤回せねばならないのだろうか？ この問いによって、  
個々人の生き方で、そして社会の身近な領域で、また国家的・国際的関係の政治的領域でそれぞれ

生じる倫理的な問いが表現されている。

先ほど挙げたクリストファーソンの歌詞の一節は、見事に三重の弁証法を汲み取っている。第一の弁証法は意味と重要性の二つの次元の間のもので、第二の弁証法は自由と我々にとって中心的な他の諸価値との緊張関係におけるもので、そして第三の弁証法は自由そのものの内的緊張によるものである。我々は自由の話題を一層明確に規定せねばならないという示唆で歌詞は始まる。我々がこの概念をどのように使おうとしているかを述べておかねばならない。クリストファーソンは、「その人が何かから自由である」というように表現される消極的自由を選んでいる。彼は、この自由なくしては他のいかなるものも我々にとって価値あるものではあり得ないということを明示している。これによって、重要性の次元が絡んでくる。また、我々人間にはもっと価値あるものがあるということも、間接的に語られている。しかし、そのうちのいずれも、「自由でなければ無価値」なのである。ひょっとすると、次のようにも表現されるかもしれない。「自由がすべてということはないが、自由がなければすべては無である」

しかし、この歌詞はもっと複雑で、しかも意地の悪いものでもある。というのも、「自由がすべてではない」と密かに指摘することだけがクリストファーソンの成し遂げたことではないからである。1969年のアメリカ合衆国では、これだけでもうありふれたことではなかった。彼は、自由に内在する緊張をも表現している。というのも、彼の選んだ定義は、確かに強制や抑圧からの自由、おそらくまた社会的因習からの自由という意味でも消極的自由を取り上げているが、しかし彼は同時にこの自由の対価を表現することによってこのことを行っているからである。ここで問題となっているのは、もはや何も失うものがない人々の自由である。このとき彼が、カール・マルクスの「自らに掛けられた鎖以外、彼らにはもう失うものがないのだから、プロレタリアートは自由である」という命題を思い浮かべたかどうかは定かではない。しかし、この消極的自由がそれ自体としては外的強制や内在化された他者からの規定の不在としてのみ捉えられているのではないということは明らかである。この自由は、ある人にこれ以上失うものがないという社会的・心理的に絶望的な状況でもある。最大の消極的自由は——この歌はそのようにも理解されねばならないのだが——悲劇的で寄り添わず当て所もない状況と不可分である。この否定的倍音を耳にすると、ついには「この自由は本当に、総じて他のものが価値を持ちうるための必要条件なのだろうか？」という問いが立てられることになる。

『ミー・アンド・ボビー・マギー』というこの歌は、もちろん哲学論文ではない。しかし、この歌詞の一節は、哲学的考察を触発する洞察とメッセージに満ちている。一見すると驚くべきことだが、このポップソングの一節は当時、そして私の推測では今日でもなお聴き手に直接働きかける。そこで取り上げられている多義性と緊張は、哲学的訓練を積んでいなくても、我々聴き手にとって受け入れやすいものである。このことは、この歌詞が今も昔も人が経験していることを一つ、あるいはいくつも、言葉で表現しているということを示している。

このたびの私の演題が機能しているならば、これらのことはすべて平和の概念に転用され得る。平和は同様の緊張のうちにある。すなわち、言葉の意味はそれによって表される現象が重層的であ

るのと同じだけ多様なのである。我々人類にとって平和は諸価値の中で中心的位置を占めており、それゆえ重要性も高い。それゆえ平和は、個人的なものであれ、社会集団のものであれ国家のものであれ、善き生と公正な共生の倫理的イメージの文脈に存する。それゆえ、私の出発点が間違っていなければ、一方では概念の解明が、他方では倫理的問いまたは理由付けが問題となる。両方とも哲学の中心的課題である。それゆえ、哲学が昔からほとんど常に自由と平和というテーマに取り組んできたのは奇異なことではない。だから、私が今日哲学者としてドイツ平和首長会議の全国大会で講演する立場にあるのはなぜだろうかと皆さんが驚かれることもないだろう。そして望むらくは、今日の催しに自由という回り道を介して接近したのも、今となってはもはや奇異に思われていなければよいと思う。平和と自由には多くの共通点がある。そして、時にこれらは互いに緊張関係にあることもある。

我々は、多くの点で不安な政治局面に生きている。核兵器廃絶のなされた世界という未来像がますます彼方に遠退いただけではない。それどころか、現在では核兵器投入というディストピアが恐ろしく近くに迫っている。力任せの振る舞いと、本物の自発性として、また率直さとしても政治の場に出回っている周囲を憚らない浅慮のせいで見通しが立たないことと合わさって、現状では不安を煽るシナリオが容易く描かれ得る。このことは直ちに、大きなレトリック、あるいは文化的イメージと語り継がれた決まり文句の呪縛に流れ込むかもしれない。

その傍らで、哲学は絶えず、純粋な概念解明や抽象的な倫理的論証もしくは単に歴史的に伝えられてきただけの観察のうちに埋没する危険にさらされてきた。私は以下では劇的に誇張するようなレトリックと際だった詭弁とをともに回避しようと思う。そのために、私はここで平和概念の多義性のうち中心的なものを皆さんに思い起こしてもらおうと思う。これらから、それと結びつたいくつかの倫理的問いが直ちに生じる。私の要求はこれらの倫理的問いに答えることではない。むしろ、これらを哲学的に解きほぐすことによって一步後にさがって、そうして我々の日常的・政治的行為を駆り立てる喫緊の問題の数々にとらわれることなく、ともに自由に考察する余地を生み出すことが狙いなのである。

## II.

ドゥーデンの辞書を引いてみると「平和」の項目に3つの意味領域が挙げられていることがわかる。第一の領域では、国内あるいは国家間の共生が平穩(Ruhe)で安全であることが、大抵は条約によって、保証された状態が問題となる。この意味領域には、平和の項目の中でもとくに平和条約の締結について述べられたものが属している。言うまでもなく、この意味での「平和」は、1648年のヴェストファリア条約によって典型的に特徴付けられている。

第二の意味領域は社会における人間関係の状態と個々の人間の心理的状态へ我々を導いていく。すると平和は「一致(Eintracht)」と「調和(Harmonie)」、すなわち平穩を邪魔されないこと、ひいては朗らかな平穩の状態を意味している。内的な「落ち着き(Ausgeglichenheit)」や充足、心の平穩

に関する話題はこの意味領域に属する。それゆえ、家族や社会集団もしくは社会全体といった社会的形成物に関しては、平和は武力衝突や、疎外や組織的冷遇または差別といった形態をとる構造的暴力の不在以上のものを表す。一致は共通の価値や規範についての基礎的理解が共通していることを表し、相互の承認や尊重を表している。我々は次のような場合のみを調和と呼びうる。すなわち、我々が共同で問題を解決し、合意が少なくとも妥協を求める場合、そして、我々が共通の基盤に立っていることを確信し、信頼が「衝突(Konflikt)」と付き合っていくための基盤をも意味するような場合である。なお、このとき互いに調和することができるのは、完全には同一であったり識別不能であったりしないものだけである。つまり、異なった人々の間でともに奏でられるべき快い響きが問題となっている。それに対して、単調な画一性は一致や調和に似つかわしいイメージではない。これには平和に必須の前提、すなわち個々人の利害関心や多様な人生設計、目的といったものが問題となっているという前提が欠けている。一致は「多元性(Pluralität)」において確立あるいは維持される。一致は多元性と、それを許容する心構えを前提とするのである。これに対して、世に言う「墓地のような静けさ(Friedhofsruhe)」が積極的なイメージを持たないのは根拠がないわけではない。この表現で想定された画一性は一致や調和とは両立し得ないのである。

こういった社会的関係の記述には、内的・心理的状态ひいては人間の態度としての平和の表象における対応語が存在する。世に言う心の安らぎ——これを自己満足やまったくナルシスティックな自己陶醉と混同してはいけない——は平和のこの次元を表している。我々は一致と同様に、ある人が自分自身と「同調(Einklang)」しているということについて話している。すると調和は落ち着きや世に言うところの「自己のうちに安らう(In-sich-selbst-Ruhen)」といった性格描写に対応している。こういった態度が自信と、人間が自らの人生を自力で歩み、自らの人生の主宰者たり得ると信じるための基礎となる。自尊心なくしては、他人を尊重することはできない。そして、信頼を自らのうちに持たない者は、他人に信頼を寄せることなど到底できない。

第三の意味領域は、ドゥーデンによると、宗教的態度の文脈にある。そこでは平和は神に庇護されているという心情を表している。この特殊な宗教的用法を離れれば、この意味領域は先ほど述べた第二の意味領域に接近する。最終的には意味があり庇護の場を与えてくれる世界に生きているということへの信頼が問題となっている。

ドゥーデンに挙げられた同義語も、この所見を証明している。多くの——とりわけ政治的な——文脈で「平和」という語は「休戦(Waffenstillstand)」や「講話(Friedensschluss)」、「協調(Verständigung)」といった言葉で置き換えられる。他の——大抵は社会的形成物の状態に焦点を当てた——文脈においては、「賛同(Einigkeit)」や「結束(Einmütigkeit)」、「融和(Einvernehmen)」、「合意(Übereinstimmung)」あるいは「同調」が適任である。そして、「和解(Versöhnung)」、「平穩」、「静穩(Stille)」は三つの意味領域すべてにまたがって使われうる。

最終試験として、我々はいずれの言葉を「平和の反対は……」という表現に書き込むのかを考えてみる事が出来る。おそらく最初に書き込むのは「戦争」だろう。そして、「暴力」や「争い(Streit)」、「衝突」が続く。しかし、「不穩(Unruhe)」や「分裂(Zerrissenheit)」もすぐに思い浮かぶ。そして、

もし我々が「平和」を「平和な(friedlich)」に置き換えてみると、「戦闘的な(kriegerisch)」「攻撃的な(aggresiv)」はもちろん、「不穏な(unruhig)」もしくは「収まりの悪い(unausgeglichen)」も対義語として見つかる。

平和は言葉の上でも実態的にも重層的な現象を表している。個々人の、社会の、あるいは国家間の状態を、そして個々人の、もしくは社会が共有している態度を。端的に言って、平和とは——私的なものであれ、政治的なものであれ——その生を歩む一個の方法なのである。

### III.

第二次世界大戦終結直後の 1946/47 年、ナチスの蛮行に追われ、ドイツ系ユダヤ人としてアメリカに亡命中だった哲学者テオドル・W・アドルノは、著書『ミニマ・モラリア』(ドイツで刊行されたのは 1951 年)に以下の言葉を記している。

こちらが弱味を見せてもそれに付け込んで強がったりしないような相手だけが、  
本当にお前を愛しているのだ<sup>2</sup>。

愛は我々人間の原体験と根本欲求に属している。愛がすべての世界宗教の中心的メッセージの核心にあるのは偶然ではない。流行歌やポップソングで自由以上に頻りに謳われている現象があるとすれば、それはきっと愛であろう。アドルノはここで、信頼して身を任せる「お前(DU)」で表されている愛される者の立場から、必要条件を述べている。向き合う時に強さ——我々はこれが権力、ひいては暴力をも確かに含んでいると見てよい——を引き起こす危険にさらされることなく、我々人間につきものの弱さを見せてよいことである。こういった危険が差し迫っている場合、自らを強く見せることのうちには不信に駆られて身を守ろうとする反応が存する。これによって始まる連鎖はしばしば、社会の冷たさや疎外、また構造的なもしくは公然の暴力としての的確に特徴付けられるような状況に行き着く。すでにここで、軍事的衝突を待たずして、平和の不在、また同じく愛の不在によって特徴付けられた人間の共生の否定的性質に我々は気づく。これに対して、「DU」では愛する能力が必要となるが、社会集団や民族全体となると団結という形で愛する能力が必要となる。アドルノが同じ箇所でのこの能力を次のように定義したならば、それは現代でも色褪せない意義を持っている。

愛というのは、似てないものに似たものを認める能力のことである<sup>3</sup>。

グローバル化された多元的世界における許容と平和的共生は、この能力なくしては上手くいかないだろう。その世界では団結の態度と以下のような心構えが必要となる。すなわち、自覚と尊敬を集める力強い態度を装えども、根本的には頑迷なエゴイズムと他者の軽視に他ならないところの強さでもって弱者に向き合うことなく、衝突や利害の対立を人間らしく穏やかに生き抜く心構えを必要とするのである。

平和はこの態度にまで局限され得ないことは確かである。最低限の幸福と社会的安全、個々人の人生設計の自由も、最低限の承認と社会参加もそれに劣らず重要である。これらは我々の平和への欲求と一致させる必要がある重要な他の価値である。同時にそれらは、我々人間が愛に必須の能力と態度を形成するための前提条件でもある<sup>4</sup>。これらすべては、私の見立てでは、万人に教養を身につける機会が開かれていること、ここにおいて、そしてこれによって整えられ確立されるのである。長期的に見れば平和は次の場合にのみ達成され得る。すなわち、我々が教養を競争へのチケットとして、あるいは自らのチャンスを増やすものとして理解するだけでなく、万人が持つ自己決定し尊厳ある生を送る権利の必須要素としても理解する場合である。

平和が第一に、あるいはただひたすらに戦争の反対として考えられ、利己的かつ武器を用意したり暴力をちらつかせたりするような信頼を欠いた根本姿勢として、言い換えれば強さとして解釈されるのであれば、それは今も昔も致命的なことである。平和とは個人と市民社会の根本姿勢である。平和は衝突を議論によって、そして他者承認という基盤に依拠して解決する戦略である。平和は個人と社会の生涯にわたる発展の課題である。戦争の終結としての平和もその一環でなければならぬだろう。しかし、それはやはり砲声が鳴り止んだり公然とした暴力が止んだりしたところで終わりなのではない。憎悪と怨恨が復権を果たさないように、ここでも記憶という文化と歴史の見直しという形での教養が必要となる。

これが新しい知見でもなければ、教養が政治的あるいは経済的に特に魅力的な活動領域でもないことを私は知っている。より長期に渡って粘り強くこの道に参加してくれる同志をすぐさま見つけて短期間で成功を収めるという見込みはおそらく少ないだろう。危機が我々にとって差し迫ったものになればなるほど、そして衝突が我々に近づけば近づくほど、それだけ強さに訴える政治や、偏見や不安をあおる扇動に陥りかねない大声のレトリックへの誘惑は大きくなる。しかしそれでも、この世界をより平和にするのは教養と団結の道であると私は確信している。

皆さんの中には、時に無力感に、さらには絶望に襲われる人があるかもしれない。同時にあなた方の取り組みは市民に、そして同時に人類全体にさえも、平和な良き生を可能にすることを根気強く目指している。哲学的考察は諦めやペシミズムと同列に扱われてはならないだろう。それゆえ、私はこの講演をエルンスト・ブロッホ——おそらく今もなお、唯一の希望の哲学者であろう——彼からの引用でもって締めくりたいと思う。『希望の原理』第一巻——これは1953年に東ドイツで出版された——の最後の一文はこう告げている。

人間も世界も共に、十分によき未来を担っているのであり、  
この根底的確信なくして、いかなる計画もそれ自体によき計画ではないのである<sup>5</sup>。

## 注

- 1 エルンスト・ブロッホ『希望の原理』山下肇ほか訳、白水社、1982年、第三巻、p. 610
- 2 テオドール・W・アドルノ『ミニマ・モラリア 傷ついた世界裡の省察』三光長治訳、法政大学出版局、1979年、p. 297
- 3 同書、p. 295. なお、引用文献では原文の“Liebe”を「恋心」と訳しているが、文脈を考慮して「愛」と改めた。
- 4 この一文は原文では“Zugleich sind die Vorbedingungen...”となっているが、著者に確認したところ、正しくは“Zugleich sind sie Vorbedingungen...”である。
- 5 ブロッホ、前掲書、第一巻、p. 595